

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520365

研究課題名（和文） 発話冒頭に出現する助詞に関する研究：話し言葉特有の現象の解明を目指して

研究課題名（英文） A study on utterance-initial-particles: aiming for investigation into the characteristic phenomena of spoken Japanese

研究代表者 中田（有田）節子 (NAKATA (ARITA), Setsuko) 大阪樟蔭女子大学

研究者番号：70263994

研究成果の概要（和文）：

日本語の最近の話し言葉特有の発話冒頭に現れる助詞 (UIP) について記述的・理論的手法で研究を進め、その分布的特徴と談話機能を明らかにした。先行文脈に依存して表現的に完結するという UIP としての談話機能がある一方で、助詞の統語的機能に対応する固有の談話機能があり、特に、発話冒頭の「は」は、提題助詞「は」によって構成される焦点提示構文の縮約として捉えられ、言いよどみ系感動詞への変化の途上にあることを示した。

研究成果の概要（英文）：

We studied the recent phenomena in Colloquial Japanese in which particles (*joshi*) appear without preceding phrases, from the descriptive and theoretical viewpoints. We showed that the utterance-initial-particles (UIPs) have a dual function; UIPs in general share a common discourse function that realizes the completeness as a form of expression depending on the preceding discourse, whereas each particle plays its own syntactic and discourse functions even appearing in the utterance initial position. The utterance-initial *wa*, especially, acquires an interjectional function because it is inspired by a focus-presenting function indigenous in its topic marking usage.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：発話冒頭 話し言葉 提題助詞 談話意味論 会話分析

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究は、本来付属語であるにもかかわらず、何らの語句に先行されることなく、文頭に単独で現れる助詞の分析を通して、話し言葉の特徴を明らかにするものである。

研究開始当初、助詞が単独で出現する現象について扱った言語学的研究は、研究代表者（有田 2005）以外ほとんどなく、会話分析の分野で格助詞が文頭に出現する現象を相互行為の観点から分析された数少ない研究があるのみであった（Hayashi 2003, 林 2005）。そこでは格助詞の単独用法について、「すでに別の文構造内に埋め込まれている名詞句を新たな文構造の枠組みの中にとりこみ、サイド・アクティビティーからメイン・アクティビティーへの『橋渡し』の役割をはたしている」とされているが、これだけでは、後述するように、本研究が中心的に扱う提題助詞「は」が文頭に現れる現象を扱うには十分とは言えない。

提題助詞「は」は、日本語学分野において、長年、主題名詞句の所与性と省略可能性が注目されてきた。日本語の統語論的研究の分野では、日本語学の研究成果をもとに、主題文の統語構造と派生のプロセスに関心が集まっていた。日本語の形式意味論研究の分野でも、所与性と総称性が主語名詞句（「ーが」）の意味的性質と比較されつつ分析されてきた。いずれの分野においても、本研究が指摘する「は」および他の助詞のみが残存する現象はほとんど扱われておらず、会話分析の分野で一部格助詞の残存現象が扱われていたが、言語事実が十分に記述されているとは言えなかった。

2. 研究の目的

本研究は、書き言葉に対し話し言葉にはどのような特有の現象があるかを解明することを目指し、その一つの現象である助詞が発話の冒頭に現れる現象の解明を目的とする。中心的にとりあげるのは、日本語の提題助詞が、名詞句に後続するのではなく、いわば「裸の」形で発話の冒頭に現れる現象で、この現象は特定の地域、世代に限定されることなく広く分布しており、今進行しつつある言語変化の一つと捉えることができる。

発話冒頭に現れるので、「まー」や「えーと」のような感動詞や、「だから」「それで」のような接続詞との関連が予想される。提題助詞「は」が発話冒頭に現れる場合、従来の用法の場合と比較して、やや長めに発声される傾向にあり、その点では「まー」や「えーと」との共通性が認められる。

一方、発話冒頭に現れる提題助詞は、提題助詞が本来持つ、先行文脈に現れる表現内容に照応するという機能も果たしている。従来の提題助詞としての用法と感動詞的な新用法との間にどのような関係があるのかを明らかにすることは、話し言葉における省略という現象に内在する一般的なメカニズムを解明する上で重要な出発点となりうる。

日本語の主題名詞句はしばしば省略されることが知られているが、なぜ提題助詞が残存しうるのか、そしてどのような条件で残存しうるのかという点は、談話文法的、統語論的なメカニズムが関与していると考えられ、そのメカニズムを統語論及び談話意味論的な視点から明らかにすることが本研究の目的である。

従来の感動詞の研究では、会話分析の手法がとられているが、本研究では、さらに、談話意味論的アプローチを取り入れることにより、発話冒頭の提題助詞の談話における意味機能を明らかにすることを試みる。談話意味論では、陳述だけでなく、真理意味論では扱いにくいとされてきた疑問文や命令文をどのように扱うかが焦点とされてきた。発話冒頭に現れる助詞の現象も、実際の話し言葉では頻繁に現れるにも関わらず、真理意味論的に扱うことが難しいと考えられ、談話意味論によるアプローチが有効であると考えられる。最終的には、統語論的研究と談話意味論的研究を統合させ、発話冒頭の省略現象一般に関するメカニズムの解明を試みることを目標としている。

3. 研究の方法

本研究は大きく基礎資料の作成と理論言語学的分析の二つに分かれる。本研究が扱うのは、話し言葉特有の現象で、しかも、これまでほとんど注目されてこなかったものなので、まず、できるだけ多くの自然会話を収集し、発話の冒頭に出現する提題助詞や取り立て助詞のデータを蓄積する必要がある。次に、これらの助詞が先行談話のどのような情報内容に照応しているのか、という観点から、集めたデータを分析する。以上が基礎資料の作成である。

つぎに、基礎資料をもとに、理論言語学的分析を行うが、統語論的側面と談話意味論的側面がある。前者については、発話冒頭に出現する提題助詞および取り立て助詞の従来の用法との関係と、発話の冒頭に残存する助詞の生成過程を明らかにすることが中心になる。後者については、動的意味論の一つである分節談話表示理論（Segmented Discourse Representation Theory）を用い

て、発話冒頭の助詞の照応関係と談話機能を明らかにすることが中心になる。以上が理論言語学的分析である。

4. 研究成果

発話冒頭に現れる助詞の現象は、名詞句の省略現象であると同時に本来単独で出現しないはずの助詞の残存現象としても捉えることができる。本研究ではこの二つの方向からのアプローチにより現象の解明を行った。以下がその成果の概要である。

まず、テレビ番組、インタビュー会話、自然談話から収集したデータを観察し、詳細に分析することにより、発話冒頭の「は」（以後「裸のハ」と称す）の前に省略されているのは、「名詞句」「後置詞句」「名詞節」「疑問節」であり、通常の提題用法のハに前接する要素に概ね一致することが明らかになった。

ここで注意しなければならないのは、「裸のハ」が常に「それは」と置き換え可能ではないという点である。これらの研究成果については、有田（2009）で公表している。

しかしながら、通常の提題用法の「は」に前接する要素がすべて省略されるというわけではなく、そこには制約がある。そこで、海外共同研究者の吉田方哉氏（Northwestern University）との共同研究により、「は」に前接する要素の省略に関する統語的制約を明らかにしようと試みた。以下、その要点のみ記す。

最初に調べたのは、裸のハの前に残りうる要素として何があるかという点である。研究代表者による事例に基づく研究では、裸のハの前に現れている要素は非常に限られていて、一部の感動詞にすぎない。（この分析については、有田 2009, 2010 で公表している。）しかしながら、さまざまな統語的テストに基づき、その制約を観察したところ、陳述副詞の一部も裸のハの前に出現できそうであることが判明した。

裸のハの語順制約に基づき、次に明らかにしようとしたのが、裸のハ句の統語構造上の位置である。

裸のハの統語的位置に関する研究は、2010年に入って少数ながら出てきた（那須紀夫 2010, 2011 など）。これは、統語論研究の課題が命題の構造だけでなく、発話機能にも広がってきたことにより、従来、統語論ではほとんど扱われなかった文の周辺部の言語現象がクローズアップされつつあることと緊密に関係する（長谷川信子 2008 など）。なお、研究代表者は、文の周辺部の言語現象を扱っている統語論研究者らと交流し、日本語文の周辺部の構造の解明を試みた。（この内容は、有田 2011. 12）として公表している。）

裸のハの統語的位置を決定するまでには至らなかったが、通常の提題のハとその用法

は共通するものの、統語的位置としては提題のハよりも上位であり、Conditional Topic (Tateishi, Koichi 1991)に近い位置にあることが予測される。

この統語的位置と談話機能についての研究も進めた。TV番組、インタビュー、自然会話の資料を分析した結果、数少ない先行研究の大半が指摘していた質問文の応答部分の冒頭に限られるという特徴は、必ずしも言語事実を正確に反映していないことが明らかになった。裸のハが質問文の応答部分以外の位置にも出現する事例は存在し、さらに、先行研究において不可能とされた質問文の冒頭に出現する裸のハも観察された。この内容については、有田(2010. 11)で発表した。

このような現象の観察を通して、裸のハが感動詞への変化の途上にある可能性があることを示唆した。この研究成果の一部については、国内外の学会、研究会で公表した。（有田 2011. 3、有田 2012. 3）

なお、裸のハが変化しつつあるのが感動詞ではなく接続詞である可能性が、談話文脈におけるゼロ代名詞について長年研究を続けている研究分担者によって出されている。裸のハがゼロ代名詞+ハであるとすると、ゼロ代名詞が許される文脈がなければならず、その意味では、文脈を要求する接続詞として位置づけなければならない。これに関連する研究成果は、奥村泰章、白井英俊（2009）、白井英俊、吉岡美奈、白井純子（2008）、奥村泰章、白井英俊（2008）で発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ①有田節子：書評論文：前田直子著『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』『日本語文法』11-2, pp. 128-136 (2011) (査読有)
- ②有田節子：“今進みつつある日本語の変化—「は」の新用法—”大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告 17 号. 62-71 (2010) (査読無)
- ③有田節子：“裸のハについての覚え書き”大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告 16 号. 95-107 (2009) (査読無)
- ④丹羽敏行、河宮信郎、白井英俊：“キーボードの文字配列の改良研究”『中京大学現代社会学部紀要』5(2), 165-183 (2012) (査読無)

[学会発表等] (計 9 件)

- ①有田節子: Ellipsis and Remaining - Distribution and function of topic marker *wa*, appearing at the beginning of utterances. Shoin Roundtable on Syntax and Semantics. (2012. 3)
- ②有田節子: 導入: 現代日本語の複文におけるテンスとモダリティ 日本語文法学会第 12 回大会 シンポジウム: 複文研究の一視点-時間と様相の相互作用- (2011. 12)
- ③有田節子: コミュニケーションのための日本語文法. 地域日本語学習ボランティア講座(文化庁委託事業) (2011. 11)
- ④有田節子: “省略と残存-発話冒頭に出現する提題助詞「は」の分布と機能-” Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7). (2011. 3). サンフランシスコ州立大学
- ⑤有田節子: 「発話冒頭に出現する提題助詞「は」の分布と機能」音声文法研究会 (2010. 11)
- ⑥有田節子: “今進みつつある日本語の変化-「は」の新用法” 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター公開シンポジウム「日本語のヴァリエーションをめぐる」。 (2009. 7). 大阪樟蔭女子大学
- ⑦奥村泰章、白井英俊: “談話構造コーパスの提案” 認知科学会第 26 回大会. (2009. 9). 慶応義塾大学
- ⑧白井英俊、吉岡美奈、白井純子: “ゼロ照応の分析: 大人向け文章と子ども向け文章の比較” 言語科学会第 11 回年次国際大会. (2008. 7). 静岡県立大学
- ⑨奥村泰章、白井英俊: “小学校教科書を対象とした日本語格解析システムの作成” 日本認知科学会第 25 回大会. (2008. 9). 同志社大学

[図書] (計 1 件)

- ①白井英俊: 『数理論理学入門』中京大学情報理工学部 136 頁 (2010)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等:

<http://www.osaka-shoin.com/univ/prof/arita/kaken.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田 (有田) 節子 (NAKATA (ARITA) SETSUKO)
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授
研究者番号: 70263994

(2) 研究分担者

白井 英俊 (SHIRAI HIDETOSHI)
中京大学・情報理工学部・教授
研究者番号: 10134462